

中野渡信行先生を偲ぶ

白 石 四 郎（政治経済学部教授）

中野渡先生が急逝されて早くも百ヶ日を過ぎ、先生は武蔵野の端に静かに眠っておられる。教授会には毎度私の隣りに坐られて穏やかな顔で挨拶されていたお姿は何時までも忘れられない印象として残っている。非常に我慢強い方で、ほとんど自分の苦しみは表現されなかったもので、病気の進行が傍目には判り難かったのではないかと想像される。大分前に厚生年金病院で手術されたので、御見舞に参上した処、実は非常な苦しみにも拘らず、見舞に対する御礼を言われていたが、実は大変な容態だと察したので早々に退散したことがある。余り我慢強いのも良し悪しだと考えさせるもので、私も痛い時や苦しい時には早く音をあげようと思っている。しかし、先生の御遺骸はまことに生前と同じように穏やかなものであったから、普段の御心ばえがその儘の容子になっていたのであろう。

先生に初めて御目にかかったのは昭和20年代も終りの頃で、赤倉武先生の御推薦によるものであった。赤倉先生は経済学と共に社会心理学も担当されていたが、社会心理学の方を最も信頼された中野渡先生に託されたと承っている。

中野渡先生は青森県十和田市の御出身で、もと三本木と言われた処である。十和田市には所用で二三回訪れたことがあるが奥入瀬川に沿った古い町で、開拓の恩人として新渡部氏の太祖社という社がある。先生の御話しによると、先生の御祖先はその開拓を新渡部氏より更に早く行われた方であるという話であった。十和田湖に向って奥入瀬を遡り、途中で右に廻って進むと中野渡という地名がある。そこまでは行けなかったが、中野渡先生の出処であるのであろう。珍しい名前なので覚え易い。八甲田山の火山灰地を奥入瀬川の水の配分で耕作可能な地にしたのだから、大変な才覚と苦勞であったに違いないが、そのような世のため人のために尽す精神が伝わっていたのであろう。先生は常に人々の面倒を良く見ておられた。また、先生の御尊父は教育者であったと承っ

ているが、この点でもまた教育的で、御兄弟もそろって教育者であられるというから、先生の御人柄も当然その要素が十分にあったと思われる。それに十和田は厳しい自然環境で冬の積雪は相当のものと聞いている。ここから我慢強く忍耐力に富む御人格が推測できるかも知れない。先生は御若い頃には体が御丈夫でなく、東京府庁に御勤務の後に郷里に戻られて教職につかれている。

戦争による激務や食糧事情などを考慮してのことと思われるが、戦中・戦後の間に体力を回復され、地方の教育のために尽されている。先生は時々、昔の教え子の子供達が大学に来るようになったのだから、自分も年をとったものだということを言っておられた。青森には先生の教え子が沢山いて活動しているのである。

先生は体が余り丈夫とは見られないのに御旅行が好きで、日本中を良く知っておられた。身軽に歩かれるので案外御自身はそう思われなかったかも知れないが、顔の色が黒くなったり、スイスで入院されたりしたことを思い起せば、本質的には病気に縁があった方であろう。それでも旅は好きで、近年には中国へ旅行され、何回も出たいと言っておられた。夢は枯野をかけめぐる程ではないにせよ、人生は一種の旅と考えられていたのかも知れない。中国旅行の御土産に絵を頂戴したが、その絵は縁起の良いもので、下に壺のようなものを置くと良いというので有田焼の花瓶を併せて下さった。今後共珍重する積りである。頂戴物と言えば近年はお酒を飲まれなくなったらしく、お酒を入手されると私の処に下さった。私も余り頻繁には飲まなくなっているので供給過剰の場合もあった位である。更に相模原産と称するブランデーを頂いたが、私の趣向に必ずしも適合しなかったけれども、御好意に謝する気持から有難く少し飲んだ。今から考えると限りなく懐しい思出である。

私は特に先生から面倒を見て頂いたと思っているが、他の方々でも同様に御世話になったと思っている人も多いであろう。私のような欠点だらけの人間でも徹底的に愛して下さった先生には感謝の念で一杯だが、他にも先生への思慕の念が強い人が沢山いる。特別な関係になくとも、皆が先生を尊敬していた。

若干の感慨をのべて中野渡先生の御冥福を祈るものである。